

点字学習の実践と 意図的な環境設定

旭川盲教諭 米澤 新



米澤教諭

きる、長丁、形の違ひを分別し、平や、立体における方向性や位置關係を理解するの積み重ねなど、様々な指活用能力を十分に身に付けた後、点字学習に移行する。

様々な情報源を視覚から取り入れられる幼児児童生徒であれば、生活環境の中に多くの文字があふれ、発音と同時に自然と文字の興味がわくことで文字学習の動機付けとなる。しかし、触覚を通じてなすを弁別する能力を高め、

(一) 幼稚園生・長年の取組

当該幼児は、3歳過ぎに病気の療養のため後天的に全盲になったためか、それまでの期間において形や色、大きさ等の概念を習得していた。視

字、書字と学習を進める。

全児童 生は、視覚の代わりに指を使って情報を得るため、手全体や指先を巧く使って物を操作することを始め、物の形を理解し、大

な以前から大切にしてきた点字を習得するための学習に関する実践の一部を紹介したい。

点字学習の実践について

本校では、幼児児童生徒の興味関心や実態に合わせた文字学習に取り組んでいく。弱視児・生は手指を使った動作や保育視覚を活用した視覚認知が収まるまで3ヶ月から

る弱視児、生の割合は高
報を得る。文字は、教師
に状況であり、中には言
児・生が在籍していない
は学校もある。そのような
中、本校は6名の在籍た
が、視覚障がいの子で分
類する。一言、生が6
名、弱視児、生が3名と
いう全国的な状況とは
異なる言数の構成となっ
てゐる。

支援者が意図的に点字を
提示して文字への気配を
につなげる必要があり、
一方で、新型「ロノウウ
イル」感染症の拡大に伴
い、触れた物は消毒をし
なければならぬ。なると
6、盲児・生の学習につ
って大切な「触れる」
活動に制限がかかる。

専門性を 継承して

1

点字への興味を高める工夫として、文字カードを天気カードと一緒に貼る活動も

めてきた。年中後期からは、点字読みの習得を目指し、点字を指先で読む感覚を磨いてきた。

点字への興味を高める工夫として、教室内で毎日使う場所や、教室内に点字を記したカードを貼り付けてきた。「つくえ」や「トイレ」を知っている言葉を書き点字にするなどして興味をもちやすくした。朝の会では教師の名前カードに、書き出された名を合わせ、顔写真や長方形の形にならなく、

[illegible]

言葉探しから
しりとり学習

た点を貼り付けた。郵便屋さん遊びの中には、点字の単語カードを触り、同じ文字が貼り付けてあるボスに投擲するマッチングの活動をした。さらに点字を読んでもみたいという意欲を高める工夫では、朝の会継続してきた絵本の読み聞かせに点字を取り入れた。触つて総が分かるように、画用紙などを組み合わせて自作した浮き出し絵本に、点字が登場する動物や言葉の広がり促す工教室前、教室の物などに、点字を貼る。当該児童は全盲で重複うち、１つないし２つの障がい児児童で、学年を下げて実態に合わせて内容での教科学習を行っている。国語科の学習では物語や説明文の理解は難しいが、詩などの短い文章や表現などを精選した内容で学習している。人とかかわることが大好きで、言葉のやり取りを楽しむことができたこと、玄関から教室までの移動時に手に触れる廊下の壁や、そのことが分かる書き追求が続いていきい。

今後に向けて

点字を学習し始める前には、環境として点字を身近に感じられるよう工夫をするなど、遊びや生活を通して自ら点字という触つて分かる文字があることに気付くことで、障がい教育の高い専門性を維持・継承し、高学級として特色ある教育活動を追求していきい。

幼児児童生徒の実態や興味関心に寄り添いながら、様々な教材や遊び、体験的な学習などを工夫し、効果的な提示方法について、今後も研修を深めて実践を積み重ね、１００年の歴史の中で培われてきた本校のもっと掲

むこに対しての興味を
高める工夫として、自立
活動の時間に点字を覚える
前段階として点字を使
った様々な遊びに取り組
んだ。ミカー遊びをする
中では、それぞれの駐車
場所には車種の単語を記し

や人物の名称などの単語
夫では、「あ」から始ま
る言葉を探す活動など、
五十音それぞれから始ま
るようにした。また、数字や
五十音をテーマにした絵
本の選び、点字に触りなが
ら話の内容が展開される
ものを扱うようにした。

(2) 小学部3年の取組
この年で覚えやすい6つ
の点で構成される点字カ
ードを通じて、さらに点字

点字表記をつけた。前述
びを感じてきっかけにつ
なげるのではないかと考
える。視覚からの情報を
得られない、もしくは得
にくい視覚障がいがある
幼児児童生徒に対しては、周囲からの意図的な
環境設定が必要であるこ

100